題目：　野口雨情研究
　　—童謡・民謡詩人の伝記的考察
氏名：　金子　未佳

論文内容の要旨

本論文は、童謡・民謡詩人野口雨情の生涯を辿りながら、その詩作活動と作品の変遷を取り上げ、伝記的考察を試みたものである。

特に、童謡・民謡詩人としての地位を確立する以前の二つの時期に注目。上京し、学業のかたわら創作し、詩壇に登場するも、父親の死によって郷里磯原に戻り、地元での詩作活動を展開した明治 38 年前後と、いわゆる「詩壇空白期」にあった雨情が詩壇への復活を果たすため、水戸を拠点に旧作の再発表と新しい作品の創作活動を行った大正 8 年前後について、先行研究や近年公にされた書簡や草稿などの直筆資料をふまえ、新たに調査した結果判明した年譜的事実や作品を取り上げている。

その結果、現在の野口雨情研究においては全集とされる『定本野口雨情』「年譜」の修正を図り、これまでの野口雨情伝にはない、中立的な立場での野口雨情の伝記研究としてまとめている。

本論文の構成は以下の通りである。

目次

序論
第一章　学生時代——詩壇登場
　一　生い立ち
　二　東京専門学校時代
　三　初期社会主義思想と挫折
　四　水戸における作品発表と郷土紙『常總新聞』
　五　「野口夕吹」と雨情
第二章　青年時代——再起を期す
　一　帰郷
　二　郷土紙『いはらき』との関わり
　三　『枯草』出版
　四　筆名の変遷について
　五　在京紙誌での活躍
　六　結婚——妻ヒロと野口秋星
第三章　樺太・北海道時代——落魄詩人
　一　樺太行き
　二　『朝花夜花』出版
　三　北海道時代の雨情と石川啄木
　四　「詩壇空白期」へ
第四章　詩壇への復活
　一　木星記念会

二　長久保紅堂との再会
三　『茨城民友』掲載作品
四　『都会と田園』出版
五　「枯れすすき」と水戸時代
第五章　童謡・民謡詩人の誕生
一　上京
二　童謡詩人野口雨情――『金の船』『金の星』
三　童謡普及運動と「夕焼論争」
四　民謡詩人野口雨情――民謡集『別後』出版
第六章　昭和初期の雨情とその晩年
一　新民謡運動と旅――「高松小唄」を一例として
二　校歌・社歌等の制作
三　戦時中の作品と晩年の創作
四　終焉
結論
主要参考文献
野口雨情略年譜
◎資料
野口雨情著作・資料年表（活躍前期）

本論文の各章各節の内容は以下の通りである。

序論

序論においては、野口雨情の先行研究を年代順に示し、その研究内容と問題点を論じている。雨情の没後、ゆかりのある人物によっていくつかの回想録が綴られたが、本格的な伝記研究を執筆したのは県職員だった平輪光三が初である。その後、多くの雨情伝や研究書が出され、野口雨情の「全集」と位置付けられる『定本野口雨情』の刊行が続いた。しかし、多くの『定本野口雨情』未収載作品が存在し、年譜的事実の空白部分が埋められていなかった。近年、雨情の自筆資料が次々と公開され、その空白部分が研究者によって埋められつつある。以上の野口雨情研究の現状をふまえ、論者のこれまでの研究と本論における論述内容について概要を示している。

第一章　学生時代――詩壇登場

一　生い立ち

本節では、野口雨情の生れた野口家の歴史的背景を紹介。雨情の出生や幼少期のエピソードに触れている。上京した雨情は、伯父の野口勝一宅に起居。東京数学院尋常中学及び順天求合社中学に進み、内村鑑三の講演を聴きに行くなど、多感な青年時代を過ごしている。雨情が幼なじみの渡邊源四郎に宛てたハガキから、当時の雨情の心情を読み解き、順天求合社中学を中退した時期についても推察している。

二　東京専門学校時代

明治34年4月、東京専門学校高等予科文学科へ入学した雨情は、明治35年3月、『小柴舟』に

「流々吟」を発表し、「野口雨情」筆名で詩壇に登場する。その後も意欲的に作品を発表し、『婦人と子ども』には、詩作の他、お伽噺の連載を始める。ここでは、『婦人と子ども』との関わりを言及し、新資料として「北鳴野人」筆名で同誌へ発表した「世界一の旅行博士」を紹介している。

三　初期社会主義思想と挫折

同時期、『婦人と子ども』へお伽噺を発表する一方で、雨情は『労働世界』（のち『社会主義』へ改題）や『少国民』に、初期社会主義思想が色濃く表れた作品を発表する。その後、雨情は初期社会主義思想に挫折し、民謡調の作品を創作するようになる。本節では、この定説をふまえ、約2年後、『いはらき』投稿詩欄選者として反戦詩ととれる内容の作品を選んでいる事実を紹介している。また、東京専門学校を中退した後の雨情の動向を探り、北海道へ渡ったとする先行研究を掲げ、推論している。

四　水戸における作品発表と郷土紙『常總新聞』

中央詩壇の雑誌に意欲的に作品を発表する一方、雨情は出身地茨城、特に水戸と深い関わりを持っていた。明治35年6月、水戸で発行する『学報』にお伽噺「白露物語」を、明治36年9月には同じく水戸発行の『暗潮』新体詩欄に「花壇の春」を投稿している。また、地方紙『いはらき』に詩作を投稿したのも明治36年春とされる。本節では、これらの作品を紹介するとともに、雨情が明治34年から35年頃、郷土紙『常總新聞』の記者をしていた事実を明らかにしている。

五　「野口夕吹」と雨情

野口存彌は『定本野口雨情』第二巻「月報2」の中で、『小柴舟』（明治35年1月）掲載の野口夕吹作「枯露柿」について、「夕吹が雨情の用いた筆名のひとつであるという可能性も十分あり得る」と指摘している。論者は、『常總新聞』明治34年10月19日付「常總文学」欄の「懐友帖」（「夕影」筆名）にある「野口夕吹兄」を手掛かりに、「野口夕吹」が雨情の筆名であると推論し、『小柴舟』と『常總新聞』の両方に作品を発表した矢橋夕影（小葩）という人物に注目。さらに矢橋が『婦人と子ども』にも作品を発表している事実を発掘し、雨情の草稿に「友小葩の関西に送る」があることからも、野口夕吹が雨情本人であると断定し、雨情の詩壇登場が通説より二か月早い、明治35年1月であると結論づけるに至っている。

第二章　青年時代――再起を期す

一　帰郷

明治37年1月、父量平が村長二期目在職中に食道癌で亡くなり、雨情は家督を継承するため磯原に帰郷する。この年、雨情は生涯を通じて大きな影響を受ける久木独石馬（本名、久木東海男）と再会。独石馬が発行する文芸雑誌『あけぼの』に詩作を発表し、親交を深めている。本節では、「野口勝一日記」にみる量平の病状と葬儀の様子を記し、久木独石馬の人物像と雨情との交友について触れている。

二　郷土紙『いはらき』との関わり

明治38年に郷土紙『いはらき』へ掲載された雨情作品と関連記事を紹介し、雨情と『いはらき』との関わりについて言及する。雨情が投稿を開始したのは明治36年春とされているが、現存する

紙面には作品は認められない。『いはらき』明治38年2月16日付掲載の「それはお無理と申もの」が初であり、以下、「金の逆鉾」、「高砂の爺媼」、「幸なきお杉」、「梅のお寺」、「殺生石」の順で一面に詩作が掲載される。他、正月の様子を日記風にまとめた「此日記」や、「北洞野客」筆名で発表した「錦石子と語る」と「横臥中」という二篇の随筆がある。また、投稿詩欄「白日放吟」の選者として選んだ「安田雨村」の作品に注目。安田雨村が実在する人物ではなく、雨情本人である可能性を指摘している。

三　『枯草』出版

明治38年3月、雨情は第一詩集『枯草』を水戸の高木知新堂より自費出版する。本節では、『いはらき』「木星会第八例会」記事や『枯草』広告及び新刊紹介文から、当時の反響と雨情の動向について明らかにしている。また、『枯草』という第一詩集としては違和感のある題名とエピグラムについて考察する。『枯草』出版直後に雨情が創作した子守唄「夕焼」についても触れている。

四　筆名の変遷について

本節では、先行研究で指摘されている雨情の筆名について紹介するとともに、論者が調査した結果、確認し得た筆名と発表作品について言及している。特に、「北洞野客」筆名で発表した作品に触れ、随筆やエッセイの他、俳句作品で用いた事実を指摘。『ホトトギス』(明治39年1月)「地方俳句界」欄掲載の「北洞野客」筆名の俳句を掲げる。また、俳句の会「潮響会」での活動と武石女羊との交友について書簡から明らかにしている。雨情の筆名の多くに「北」の一字が付く理由について推論している。

五　在京紙誌での活躍

これまでは、雨情が帰郷し、友人久木独石馬主宰の『あけぼの』への投稿を経て、明治38年の『いはらき』紙上での作品発表と詩作活動について言及してきたが、明治38年は在京紙誌にも積極的に作品発表を展開した年でもある。本節では、『讀賣新聞』や『ハガキ文学』などに掲載された雨情作品を紹介し、雨情が中央詩壇で活躍した事実を言及する。また、『ハガキ文学』への作品発表の契機について、先行研究の鈴木善太郎が橋元春郊を紹介したとする説に加え、鹿目野徑と橋元春郊との繋がりを指摘している。

六　結婚――妻ヒロと野口秋星

野口雨情の最初の結婚年月日については諸説あり、未だ確定には至っていない。本節では、先行研究をふまえながら、関連資料から婚礼の時期を明治37年11月（日にちは不明)、戸籍の記載から婚姻届を提出したのは明治38年5月22日と考察する。また、妻ヒロの人物像を探り、「野口秋星」や「秋星女史」の筆名を用い、『いはらき』紙上で活躍した文学者としての一面を紹介している。また、近年の雨情研究でヒロの作品とされた、『いはらき』掲載の「秋星」筆名の俳句については、『いはらき』俳句欄を調査した結果、ヒロの作品ではないと結論付けている。

第三章　樺太・北海道時代――落魄詩人

一　樺太行き

明治39年7月、雨情は樺太へと赴く。友人武石女羊に宛てた書簡を紹介し、自らを「落魄詩人」

を称した当時の雨情の心境を探る。また、先行研究をふまえ、樺太行きの理由とその目的について推論し、樺太滞在中の雨情の動向と樺太を題材にした作品についても言及している。

二　『朝花夜花』出版

樺太を離れた雨情は、磯原には戻らずに東京へ向かう。明治40年1月から3月にかけ、詩集『朝花夜花』第一編と第二編を自費出版する。『朝花夜花』は現在まで所在が判明せず、『定本野口雨情』未収載である。本節では、新刊紹介記事や書評から収録作品と当時の詩壇での評価を読み解く。また、早稲田詩社の活動に積極的に参加していた雨情が、突然北海道行きを決意した理由についても推論している。

三　北海道時代の雨情と石川啄木

北海道に渡った雨情は、札幌の北鳴新報社へ入社し、その後、小樽の小樽日報社へ移る。『小樽日報』創刊に携わり、石川啄木とともに三面記事を担当する。石川啄木の「日記」から、啄木との出会いと雨情が小樽日報社を去ることになる顛末を読み解いた。また、北海道滞在中に報じられた雨情客死の誤報記事や坪内逍遥の書簡、岩屋泡鳴との関わりなど、周辺資料から雨情の北海道での動向を明らかにしている。

四　「詩壇空白期」へ

北海道から上京した雨情は、有楽社に勤め、『グラヒツク』の編集にあたった。『グラヒツク』に執筆した署名記事のうち、「諸国盆踊唄」は全国各地の盆踊唄を紹介したものである。この内容により、雨情が全国に伝わる俚謡や俗謡を収集する作業を続けていた事実を知り得るとする。『讀賣新聞』明治45年6月12日付掲載の「文芸に現はれたる好きな女と嫌ひな女」以後、雨情は詩壇から離れて帰郷し、「詩壇空白期」を迎える。近年、研究者によって明らかになった「詩壇空白期」とされていた期間に発表した雨情作品を掲げ、「詩壇空白期」の修正を図るとともに、大正2年の『いはらき』にみる「野口生」署名の記事について、雨情が寄稿したものではないかとの推論を示している。また、この間に生じたヒロとの離婚問題について触れている。

第四章　詩壇への復活

一　木星記念会

本節では、大正7年1月6日に水戸で開催された「木星記念会」への出席が、雨情のその後に非常に大きな意味を持ったと言及する。また、つると再婚し、水戸に移り住んだ時期について、つるが後年語った記事を取り上げ、当時の雨情の創作活動の状況を示している。

二　長久保紅堂との再会

水戸時代の雨情と深く関わりを持つ旧友長久保紅堂に注目し、紅堂が発行する『茨城民友』と再刊計画中の『茨城少年』について触れている。『茨城少年』の再刊までの経過について、『茨城民友』掲載の広告記事や書簡から明らかにしている。

三　『茨城民友』掲載作品

先行研究で明らかになった大正7年1月発行の『茨城民友』掲載「春告鳥」以後、『茨城民友』

に発表された雨情の作品を掲載順に紹介。『茨城民友』発表作品が、当初は旧作の再発表であったと論じている。また、本論文執筆中に確認し得た「柵町の女」作品を紹介している。

四　『都会と田園』出版

大正8年6月、雨情は詩集『都会と田園』を自費出版し、詩壇復活を果たす。本節は、『都会と田園』収録作品のうち数篇を取り上げ、それぞれの作品について論じている。また、『都会と田園』刊行から上京までの約1年間に注目。この間に出された『茨城民友』にある入社広告や書簡をもとに考察する。『茨城民友』に載った妻つるの短歌一首も合わせて紹介している。

五　「枯れすすき」と水戸時代

本節では、水戸時代に創作したといわれる「船頭小唄」（原題「枯れすすき」）を取り上げている。この作品が関東大震災を予兆したと憶測を呼んだとする説や、舞台となった利根川や潮来に行かずに創作したエピソードを紹介している。また、野口雨情の名で『イハラキ時事』誌上に発表された「長恨迷ふ小松村」について、薗部雪石という別の人物の作品であるとする説を掲げ、その可能性を推察している。

第五章　童謡・民謡詩人の誕生

一　上京

『都会と田園』で中央詩壇に復活。大正8年11月には『金の船』に童謡を発表し、その後ほぼ毎号同誌に作品が掲載されているが、雨情は水戸の地で創作活動を続けていた。本節では、上京するまでに発表した童謡作品を紹介し、雨情が上京に至るまでの経緯についてまとめている。

二　童謡詩人野口雨情――『金の船』『金の星』

上京した雨情は、『金の船』編集部の仕事をしながら、同誌へ童謡を発表し、童謡欄選者としても活躍する。本節では、『金の船』（のち『金の星』改題）を中心に、雨情の童謡を発表年代順に掲げ、それぞれの作品について言及している。また、『コドモノクニ』や『金の塔』など、他の雑誌との関わりや発表作品を取り上げている。

三　童謡普及運動と「夕焼論争」

大正9年9月、雨情を中心に東京童謡会が結成される。これを契機に、童謡に関する講演会や朗読などを行う、童謡普及運動が全国各地に広がりを見せるようになる。本節では、『金の船』掲載の「金の船消息」から、当時展開された童謡普及運動における雨情の動向を探っている。また、横瀬夜雨との間で起こった「夕焼論争」を詳述し、雨情と夜雨との童謡観の違いを明らかにしている。

四　民謡詩人野口雨情――民謡集『別後』出版

大正10年2月、民謡集『別後』が、尚文堂と交蘭社という名前の異なる同一の会社から発行された。尚文堂版のあとがきには、収録中の民謡が『枯草』、『朝花夜花』、『都会と田園』発行当時に創作した作品であると記される。特に、冒頭の「焼山小唄」、「おたよ」、「萱の花」、「旅の烏」、「三度笠」、「夕焼」、「河原柳」、「鳴子引」、「烏」、「みそさざい」は、『朝花夜花』収録作品を改作したものであり、このことから、雨情が明治40年代に創作民謡の基盤を確立していたと考えられる。ま

た、関東大震災時の雨情の動向と、震災後に発表した民謡についても言及している。

第六章　昭和初期の雨情とその晩年

一　新民謡運動と旅――「高松小唄」を一例として

本節では、昭和初年に展開された新民謡運動について、「高松小唄」を一例として、雨情の新民謡普及の旅での動向と、各地の新民謡を作るまでの経過を、香川県下で発刊する新聞記事中より明らかにしている。引用した雨情のエッセイ「民謡の旅より」には、限られた滞在日数の中、様々な注文を出され、短冊や色紙の揮毫を大量にこなしながら、その合間に新民謡を期日までに完成させなければならない苦労が綴られており、非常に過酷な旅であったと理解出来る。雨情が旅先から投函した家族宛の手紙を取り上げ、子煩悩な父親としての一面を紹介している。

二　校歌・社歌等の制作

本節では、雨情が制作した校歌・社歌について言及している。野口雨情記念館ホームページによると、雨情の校歌は、国内外を含めて 31 校認められているという。そのうち、現在も歌われている 15 校のうち土浦市立土浦小学校の校歌を取り上げている。「キッコーマン社歌」や蜂ブドー酒の広告に使われた「蜂のお酒」、ドン白粉本舗のCMソング「ドンの歌」などを紹介している。これらの作品は、ほとんどが昭和期に作られ、特に昭和 13 年から昭和 17 年に集中。児童雑誌が相次いで廃刊し、童謡の依頼が減っていった時期と重なる点を指摘する。

三　戦時中の作品と晩年の創作

『金の星』が終刊し、子供向け雑誌の発行も少なくなり、雨情の童謡作品発表の場が限られるようになる。本節では、この時期に多く作品を発表した『コドモノクニ』との関わりについて言及している。また、「軍人遊び」や「爆弾三勇士」、「水戸歩兵第二聯隊の歌」、「大東亜戦争」など、戦争を題材にした雨情作品を取り上げ、当時の雨情の心情について推察している。

四　終焉

昭和 18 年 2 月、雨情は軽い脳出血の発作を起こす。体調は回復せず、昭和 19 年 1 月、病気の療養に専念するため、そして空襲を逃れるため、栃木県へ疎開する。本節では、雨情の疎開生活を伝える新聞記事や書簡を紹介している。

結論

本論で明らかにした雨情の年譜的事実や新資料について言及している。論者は、近年公開された雨情の自筆資料や自ら収集した関連資料と合わせて分析した結果、野口存彌が可能性を指摘するにとどまっていた「野口夕吹」が、野口雨情の筆名の一つであると断定し、詩壇登場の時期を二か月早い明治 35 年 1 月とした。また、『婦人と子ども』に「北濤野人」筆名で掲載された「世界一の旅行博士」を雨情作品として全文を紹介している。さらに、大正 8 年 1 月発行の『茨城民友』掲載の「柵町の女」を発見している。これらは全て、本論において初めて発表するものである。未だに確定していない雨情年譜の空白部分については、今後の調査研究の課題とし、さらに、同時代の詩壇的状況や詩人を視野に入れ、野口雨情の伝記的考察をより深めていくとしている。

野口雨情略年譜

『定本野口雨情』第八巻野口存彌編「年譜」等の先行研究における「野口雨情略年譜」を参照し、近年の雨情研究と論者の調査研究により明らかになった年譜的事実を盛り込み、新たな「野口雨情略年譜」を作成している。

◎資料

野口雨情著作・資料年表（活躍前期）

本資料は、野口雨情の生涯を論者が便宜的に「活躍前期」と「活躍後期」の二つの時期に分け、「活躍前期」において、現存し、かつ公表された、雨情の著作、書簡及び関連資料を年表化したものである。「活躍前期」とは、野口雨情に関する最古の資料となる、明治31年4月26日記述の「野口勝一日記」を始まり、本格的に童謡・民謡詩人として活躍する大正9年12月31日までの著作・資料を終わりとする。「著作年表（作品名／筆名／発表誌（紙）名」、「投稿欄選者（投稿欄名／選者名）」、「書簡（封書・葉書）」、「資料年表（資料名／執筆者名／掲載誌（紙）名」の順で収録する。